

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	加速器駆動システムを用いたTRU燃料サイクルの核不拡散性に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	大泉昭人
Author(English)	Akito Oizumi
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12234号, 授与年月日:2022年9月22日, 学位の種別:課程博士, 審査員:相樂 洋,小原 徹,千葉 敏,林崎 規託,片淵 竜也
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12234号, Conferred date:2022/9/22, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第		号	学位申請者氏名		大泉 昭人	
論文審査 審査員		氏 名		職 名			
	主査	相樂 洋		准教授		片渕 竜也	准教授
	審査員	小原 徹		教授			
		千葉 敏		教授			
		林崎 規託		教授			

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は「加速器駆動システムを用いた TRU 燃料サイクルの核不拡散性に関する研究」と題し 7 章から構成されている。

第 1 章「序論」では、放射性廃棄物処理処分の課題、加速器駆動システム (ADS) を用いた分離変換技術の研究開発の意義を述べた後に、包括的な核不拡散性研究がなされていない課題を既往研究から指摘し、ADS サイクルの潜在的核拡散リスクを定量化し、それを活用した核セキュリティ並びに保障措置の設計要求と成立性を明らかにすることを目的とし、本研究の位置づけ、意義を述べている。

第 2 章「ADS サイクルにおける潜在的核拡散リスク定量化手法の開発」では、従来の不正利用価値評価手法では、TRU 燃料サイクル特有の ^{234}U を多く含む U が潜在的に高い不正利用価値を有していること、乾式分離プロセスにおけるリスクを適切に評価できない課題を指摘し、国家および非国家主体を対象とした不正利用価値を評価できる新たな潜在的核拡散リスク定量化手法を開発したとしている。

第 3 章「ADS サイクルにおける潜在的核拡散リスクの定量評価」では、ADS サイクル内の各施設で扱われる核物質を対象に、開発した手法を用いて潜在的核拡散リスクを定量的に評価している。まず、 Pu を使用対象とした評価では、ADS サイクル内に存在する新燃料および使用済燃料問わず全ての核物質の不正利用価値は 4 段階中下から 2 番目の 3 と評価され、使用済 BWR-MOX 燃料と同等の低い潜在的核拡散リスクに抑えられることを明らかにしている。次に、 U を使用対象とした評価では、非国家主体に対しては 3 または 4 と潜在的核拡散リスクを非常に低く抑えられるが、国家主体想定に対しては 2 または 3 と評価され、ADS サイクルの中で最も高い潜在的核拡散リスクとなることを見出している。 ^{234}U を単離しない TRU サイクルにより技術的に解決可能であることを明らかにしている。

第 4 章「ADS サイクルの核物質防護システムの設計」では、第 3 章で得た潜在的核拡散リスク情報に基づいた核物質防護区分を決定し、核物質防護システムのリスク評価により設計評価している。その結果、ADS 施設内の核物質は一般的な MOX 燃料を使用した軽水炉で求められる区分から 1 段階下げることが可能であり、内部区域が不要となり建設コストを削減しても防護性能を維持できる合理化可能性を明らかにしている。

第 5 章「ADS サイクルの保障措置システムの設計」では、第 3 章で得た潜在的核拡散リスク情報を用いて実効的な保障措置システムの設計を行っている。計量管理システムでは、核物質の測定技術毎の測定精度目標を参考に、TRU 燃料サイクル内の核物質流量に対し、事業者による計量測定及び規制者による検認測定の不確かさ (σ_{MUF}) をそれぞれ導出し、1 有意量 (SQ) 及び使用済燃料基準 (5% 相当) と比較している。 Pu に対する σ_{MUF} は、事業者及び規制者共に 1SQ を超えるが使用済燃料基準は概ね達成可能であること、 U に対する σ_{MUF} は、事業者及び規制者いずれも 1SQ 以下となるが、使用済燃料基準と比較すると事業者側は満足するものの規制者側は同基準を満足しないことを明らかにしている。また、補完システムとして、封じ込め・監視、非破壊測定に加え、原子炉及び加速器運転履歴の常時監視により、核物質転用や施設の不正使用を検知できることを明らかにしている。

第 6 章「潜在的核拡散リスク情報を活用した ADS サイクルの核セキュリティ及び保障措置への要求と課題」では、第 2 章から第 5 章で得られた知見を基に、ADS サイクル設計に反映すべき方策や課題について述べている。TRU 燃料サイクル特有の ^{234}U を多く含む U を高濃縮 U 相当として厳しく規制すべきであること、またその潜在的核拡散リスク低減のために TRU 回収時の U の低除染化や、 U 単離を困難にするケイ化物燃料の活用を提言している。また保障措置において、高放射線源である TRU から U 、 Pu 量の測定を行うことが可能な新たな非破壊測定技術、および乾式再処理の熔融塩電解槽中の核物質測定技術の必要性を示している。また核物質防護において、ADS 安全研究の進捗に合わせ、概要区域の特定と妨害破壊行為に対する防護措置の研究必要性を示している。

第 7 章「結言」では、各章によって得られた結果を総括し、本論文の結論としている。

これを要するに本論文は、ADS サイクルの潜在的核拡散リスク情報に基づく合理的な核セキュリティ並びに保障措置の設計が可能であることを明らかにしており、原子力平和利用に対し技術的に資するものであり、工学上および工業上貢献するところが大きい。よって、本論文は博士 (工学) の学位論文として十分価値のあるものとして認められる。

注意: 「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチポジトリ (T2R2) にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。